



アベリア

56編はダビデの詩、「はるかな沈黙の鳩」という曲に合わせてとあります。鳩は神が命と希望を私達に与えられる象徴として送られる小鳥ですが、「はるかな沈黙」とあれば、忍耐の時を偲ばせる曲想なのではないでしょうか。「ミクタム」とは文学上の、または演奏上の用語であろうとされています。端書きに **ダビデがガトでペリシテ人に捕らえられたとき** とあります。聖書にはダビデがペリシテ人に捕らえられたとは記されていません。ダビデは祭司アヒメレクが殺害された後、サウルを避けて国境の町ガトの王アキシユの下に1年4カ月の間、身を寄せました。この時期のことを歌ったのでしょうか。

ダビデは少年時代にペリシテ人ゴリアトを倒し、一躍王に抜擢されて以来、生涯ペリシテ人と戦い続けました。ペリシテ人はパレスチナ人の語源であり、地中海沿岸に住む民族です。ダビデが「はるかな沈黙の鳩」になって、敵地で客将として忍耐の時を過ごしたのでしょうか。

ダビデはサウルから命を狙われていましたので、行き場がありません。ダビデはアキシユに恭順に貢物をしました。アキシユはダビデを信じ、温存しました。けれども、ダビデは人々の前で涎を垂らしたり、城門の扉を掻きむしったりして、異常な振る舞いをして、一線を画する策をも取っていました。

詩人は八方ふさがりの中で、神に依り頼み、賛美することにより、忍耐する力を得ていました。けれども、極限の苦しみを味わっていたのでしょうか。同胞に踏みにじられ、戦いを挑まれ、陥れようと罠を仕掛けられ、故国を追われています。 **神よ、わたしを憐れんで下さい(56:2)** と、最初に憐れみを求めています。 **神の御言葉を賛美します。神に依り頼めば恐れはありません。肉にすぎない者が私に何をなしえましょう(56:5)** と、神のみ言葉への信頼を述べています。

一方、詩人は **わたしの言葉はいつも苦痛となります(56:6)** という部分が興味をそそられます。敵国に寄留しています。敵の前では言葉に気をつけ、真意を悟られないように、時には欺かねばならないという詩人の苦い苦しみを述べているのでしょうか。ペリシテ人は偶像に寄り頼み、偶像を逃れ場としているゆえに、真実の言葉を聞くことがないと知っているのです。彼らは待ち構えて、詩人に隙があれば、襲い掛かろうとしているのです。神がこの異邦人を屈服して下さるように、と願っています。そして **あなたはわたしの嘆きを数えられたはずです。あなたの記録に／それが載っているではありませんか。あなたの革袋にわたしの涙を蓄えてください(56:9)** と、苦境を訴えています。

詩人は再び、神を呼び、 **神の御言葉を賛美します。主の御言葉を賛美します。神に依り頼めば恐れはありません。人間が私に何をなしえましょう(56:11)** と、同じ言葉を繰り返して、神への信頼を捧げています。どのような苦境にあっても、希望をもって将来を目指しています。

**神よ、あなたに誓ったとおり／感謝の献げ物をささげます。あなたは死からわたしの魂を救い／突き落とされようとしたわたしの足を救い／命の光の中に／神の御前を歩かせてくださいます。(56:13)** 詩人は、逆境の中で与えられた境遇を感謝し、神の光の中で歩もうと願っています。

「讚美歌21」は437「行けども行けども」を関連讚美歌としています。私は55編にも437を関連讚美歌としましたので、J.S.バッハのコラール、「われら悩みの極みにありて BWV641」を聞きたいと思います。静かで穏やかで、とても癒される讚美歌です。

参照 <https://www.youtube.com/watch?v=jjjh3D5TpZk>